

起業家よ米で育て

シリコンバレー新大学構想

ベンチャー企業の聖地、米シリコンバレーで、学生らが日本語で起業論などを学びながら、アイデアの事業化にも挑戦できる大学を設立する構想が関西で動き出している。日本人留学生数は10年間で3割減るなど若者の「内向き」志向は強まっている。危機感を抱くシリコンバレー在住の日本人起業家と、呼応した関西の起業支援のプロが連携して来秋の開校に向けて奔走している。



米国での大学設立に向け意見を交わす(左から)長川さん、樹本さん、瀬川さん(大阪市北区)

大阪出身社長ら 講義は日本語

「日本人はなぜシリコンバレーで成功できないのか」。大学の設立構想は同地在住の起業家、樹本博之さん(52)が抱えてきた悔しさが根底にある。日本人少なく、大阪で育ち、東洋紡で営業などを経験後に渡米し、2000年に研究試薬の販売会社「ヒューリック・インターナショナル」をシリコンバレーで設立。社長として世界に顧客を抱える企業に育てた。だが周囲を見ると成功した起業家の多くは中国やインドなどの移民一世代で、日本人の存在感は低かった。

高い技術力や相手に合わせた柔軟な営業……。米国でこそ感じる日本人の強さを押し出せば、ヒト・モノ・カネが集まり

タップ関西

発信力があるシリコンバレーで成功できるはず。ネットは英語。「ならば日本語で起業を学べる大

学をつくって人材を育てよう」と思いついた。昨年11月、現地に住む日本人の起業家仲間と呼び掛けて新大学「SVJU(シリコンバレー・ジャパン・ユニバーシティ)」の設立検討委員会を設置。来秋にはまず地元大の1学部として発足して学生を受け入れ、大元大の1学部として開校する計画だ。

学生は大学ゼミの学生や企業社員などに個別に声を掛けて募集し、数十人の規模が目標。地元大などで英語を学習、「アントレプレナー(起業家)

論」など日本語の授業は樹本さんら現地起業家や、日本の大学教授も講師を務める。学生は自らのアイデアを投資家と交渉しながら新規事業の立ち上げも試みる。

構想には大阪市の外郭団体が運営する「大阪産業創造館」(同市中央区)で中小企業支援を手掛ける長川勝男さん(50)も参画。元銀行マンで、不景気にあえぐ関西企業を目的の当たりしに、成功した企業が東京へ出て行く姿を見てきた。「『新しいことをやるならば大阪』と人が集まるようにしたい」と期待する。

世界で闘う人に
大阪市のイノベーション創出拠点「大阪イノベーションハブ(OIH)」などで次世代ロボットやIT(情報技術)関連の起業などを支援するベンチャー出身の瀬川寿幸さん(38)も人脈を生かして連携先の確保に当たっている。「世界で闘える人となってシリコンバレーから関西に帰ってきてほしい」との思いは長川さんと同じだ。

新大学の国内窓口となる「関西事務局」の開設を目指す長川さんと瀬川さん。米国から2人と連

携する樹本さんは「シリコンバレーは挑戦と失敗を受け入れる場所。関西から勇気を持って海を渡ってきてほしい」と呼び掛けている。(佐野敦子) 随時掲載